子どもと命を感じるという事

ぽっかぽか栞保育園　園長　髙橋　まり子

これは、小規模保育園で子ども達と一緒に生き物の命をつないだ保育記録です。子ども達に、生き物の命をどうやって伝えていこうかと悩んでいるたくさんの保育士の方に、私たちがお蚕様の飼育を体験した日々をお伝えしたいと思い書きました。

今年の5月。1名の職員が、私にお蚕様を保育園で飼えないかなと話をしてくれました。小学生の時に1度だけ飼育する様子を見たことがある、あの白くてうねうねとたくさんの数が動く、お蚕様を?保育園で?子ども達が?私たちが?

保育士になって25年が過ぎ、小規模保育園の園長になって4年過ぎましたが、0歳から2歳児の子ども達が生き物を飼うという事について私は迷っていました。

子ども達にとって身近な生き物である蝶やとんぼやバッタ、蛙、かたつむり。子ども達は試行錯誤しながら、自分たちの力で捕まえることができるようになっていきます。自分で捕まえることができた事、さっきまでの自分とは違う事を少し誇らしそうに飼育ケースの中に入れて、観察がはじまります。

「何を食べるのかな?」「お水が欲しいのかな」小さな子ども達なりに大切にしても、捕まえた昆虫や生き物たちはすぐに命を落としてしまうことがほとんどです。「動かなくなっちゃったね」と気づいた後に、私たち保育士は『お別れ』『お空』『いのち』という言葉を使って子ども達に繰り返し伝えてきました。

それは、1年のうちに何度も繰り返されていく出来事なのです。保育の中で『命』を知るきっかけとしながら、その『命』は粗末になっているのではないだろうか…と私は迷っていました。

私が知っていたのは、蚕という昆虫がシルクを作り出すという事だけ。

すぐにSNSでの検索が始まり、蚕が一生のうちにもたらす様々なものを知って驚き、魅了されました。

『おかいこさま』と呼ぶ理由。繭玉の中でさなぎになる事。さなぎから蚕蛾が出てくること。繭玉から糸をとるなら、このタイミングで命をいただくこと。

分からないながらに、ここで子どもたちと一緒に新しいことを知ってみたいと思い、

職員会議の結果、保育園でのお蚕様の飼育が始まりました。

お蚕様が保育園にやってきた。

6月1日。小さな子ども達の手の小指よりも小さな小さなお蚕様は、丸森町から仙台の保育園にやってきました。その姿は、想像していたより可愛らしく、子ども達はすぐに仲良しに。

『おかいこさまっていうの?』『はっぱを食べるんだね』『ちっちゃいね』と触りたくてうずうずず。

1歳9か月の男の子が、最初に手のひらに乗せました。

「すごーい」

お蚕様は、桑の葉の上からほとんど動くことがなく、蓋のない空き箱の中で桑の葉っぱをとにかくよく食べている。

『みんなとおんなじ。朝、昼、夜ご飯を食べるんだよ』

しかし思ったより可愛らしいとはいっても、私を含めて大人たちは『きゃ〜』と大きな声を出すだけでお蚕様が食べている葉っぱにも触れられない日々。たくさん食べてウンチをすると、お蚕様の部屋が汚れてしまうことに気が付いた子どもたちの『お部屋の掃除』『葉っぱの交換』が始まりました。

10日が過ぎたころ、たくさんの子ども達がお蚕様を手のひらに乗せられるようになっていました。

2歳の男の子がお蚕様を眺めながら**「おおきいよ」**と言いました。

確かに。保育園にやってきた時より大きく、倍のサイズになっているお蚕様もいる。毎日お蚕さまを見ている子ども達も感じることができるほど、お蚕様の成長は早い。これは発見でした。

小さいお蚕様が**大きい**になった。

「おかいこさまおなかすいてないかな?」

自分たちのあげた桑の葉を食べて大きくなる。お蚕様は、**生きている。**という事を大人からの**言葉**ではなく、小さな子ども達が実体験から感じた瞬間だったと思います。

お蚕様がやってきて2週間が過ぎ、子ども達とお家**【まぶし】**作りが始まりました。お蚕様が気に入ったお部屋に入って繭を作り始める準備です。

この頃には、1歳の子ども達もお蚕様に桑の葉っぱをあげる姿が見られるようになり、子ども達はお父さんお母さんに、お蚕様の話をするようになっていました。

「どこのお家に入るかな?」「ぼくはこっちだよ」子ども達とトイレットペーパーの芯を重ねて作ったお家は全部で4棟。ゴールドミサキヒルズ。メゾン AOBA。エッグハイツ。シルクヒルズ。それぞれに名前を付けて子ども達と見守りました。

この時子ども達にとってお蚕様は、今まで飼育ケースの中で観察した生き物とはまるで違う存在になっていました。

「そーっとだよね」「おいしいって、いってるよ」「そんなにつんつんしたらしんじゃうんだよね」「おかいこさまってかわいいよね」生きている事を愛おしむ姿を、子ども達に沢山見せてもらった毎日でした。

子ども達が交換した桑の葉を美味しそうに食べて、どんどん大きくなったお蚕様はこの時から少しずつ桑の葉を食べなくなり始めていました。

3週間が過ぎ、保育園にやってきたお蚕様はみんな揃って無事にきれいな繭玉を作りました。動かなくなり、そっと顔をあげて口から糸を出す。頭を八の字に動かしながら、ゆっくりと1日かけてまゆを作っていくお蚕様。子ども達と一緒に　何度「がんばれ」と言ったでしょう。もう桑の葉っぱを食べるお蚕様の姿はなくなったのです。

さあここから、今まで大切にお蚕様の命を守ってきた子ども達と相談が始まります。

2歳児の子どもたちを中心に写真を使って、話しました。

お蚕様は繭玉の中でさなぎになり、蚕蛾になって出てくることができる事。姿を変える準備をしている事。でもこの繭玉は、きらきらした糸にもなる事。糸を使っていろいろなものを作れること。糸を作る場合はお蚕様とここで「さようなら」する事。それは「命がなくなる」という事。

言葉が、子ども達にどのくらい伝わったのか今でも分かりませんが、今日まで子ども達と一緒にお蚕様が大きくなる様子を見てきた私は、子ども達がお蚕様は**生きている**という事を知ることができたと確信していました。そのうえで、子ども達が一人ひとり、どちらを選択するのか待ちました。

保育園で一番小さな9か月の男の子も指差しで選び

キラキラした糸を見たいので繭玉を冷凍することを選んだ子どもと職員は15人。

繭玉のまま成虫になるのを待つことを選んだ子どもと職員は8人。

保育室に8つの繭玉が残ることになりました。

「ぼくのはいつ出てくるのかな?」

七夕の日です。とうとう繭玉の中から1匹の蚕蛾が出てきました。白くてふわふわして小さくて可愛い。子ども達も私もその姿に夢中です。

蚕蛾は口を持っていません。何も食べずに、交尾をして卵を産んで命を繋ぐために出てくるのだそうです。

生まれたての蚕蛾を見て「ぼくのはいつ出てくるの?」

2歳7カ月。ちゃんと自分がどっちを選んだか覚えていたのです。

蚕蛾は順番に繭玉を溶かして姿を現し、交尾をし、お腹を大きくした後に、小さな小さな卵をたくさん産みました。
その姿も一緒に見守りました。
卵は黒色に変化し、それは間違いなく受精卵でした。
小さな生き物の命を、子ども達と一緒に繋ぐことができた。

そしてそのすぐ後に、蚕蛾はみんな動かなくなったのです。「さようなら」の時です。
「おかいこさま、ほんとうにうごかなくなっちゃったの？」
いつもは、たくさんの言葉で命を伝えてきた私たちですが、この時は、子ども達にたくさんの言葉は必要ありませんでした。

7月25日。お布団を敷いた小さな箱の中に入れてあげた後
「おかいこさま、さようならしようね」
小さな手を合わせて、目を閉じて
「さようなら。」

お蚕様との「さようなら」の時は、子ども達が命を大切にして過ごした証となりました

あとがき

振り返ってみると、1か月ちょっとお蚕様と一緒に過ごしただけでしたが、「え？あれは1か月だけだったの？」と驚いてしまうほど、蚕の飼育体験はとても濃い時間でした。
子ども達が夢中になった理由。桑の葉を食べて大きくなっていくお蚕様の姿を見て、繭玉になり、蚕蛾になり、卵を産んで動かなくなっていく。目に見えて変化していくその様子から子ども達は**「生きている事」**と**「死んでしまう事」**を本当に意味で知ったのだと思います。実体験から感じた生き物を愛しむ気持ち。
これは、保育士を長くやってきた私にとっても、子ども達と一緒に命を体験することができた初めての経験でした。思いがけず始まった、お蚕様の飼育体験が、小規模保育園で生き物を飼うことの意味にずっと迷ってきた私に答えを教えてくれたと思いました
0歳から2歳の子ども達も命を感じることができる！

9月の親子行事。
子ども達が命を繋いできたお蚕様のおくりもので、繭玉からの【糸繰り】、繭綿から紐を【撚る】作業をお父さんお母さんと一緒に楽しむことができました。
保育園での活動が、子どもから保護者へと繋がれた時間。これもお蚕様からいただいた、大きな贈り物でした。